

---

# 聖戦ロイア

当麻 紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖戦ロイア

### 【Nコード】

N9802I

### 【作者名】

当麻 紫苑

### 【あらすじ】

千年前＜混沌の時代＞といわれていた頃、長きに渡り争い隣国ラスベルクと戦争を繰り返してきたロイア王国。だが、次第に敗戦の色が濃厚になったロイアは王太子の戦死をきっかけにラスベルクに降伏、国王夫妻は自害をし、残された世継ぎの王女は戦火の中行方不明という悲劇を迎える。

復仇の思いを抱く王女エリン、戦術予報士を志す天才少年アスラン、謎の少年グドを取り巻く運命は。

## ブローグ

双狼大陸　　双頭の狼の形を抱く大陸　　に伝わる名高い言い伝え  
の中には次のようなものがある。

<白狼王>と<森ノ民>の娘のサーガ、<東狼の国>アルカシアの  
民族統一、売国妃の裏切りに遭い、いったんは滅亡したローディア  
王国を見事に再生させた賢君<黒衣の王>の善政　　など。

だが、そのローディアにはもうひとつ伝説的な言い伝えがある。お  
よそ二千年の歴史を持つ由緒正しきローディアがまだロイア王国と  
呼ばれていた頃、千年ほど前に起きた出来事のことだ。

後の世の人々は<それ>のことをこう呼ぶ。

<聖戦ロイア>、と　　。

## プロローグ（後書き）

ところどころクリンダの翼>とリンクする予定です。ただこちらは  
ひたすらシリ阿斯になるはず…  
感想等があったらぜひ。

## オクタヴィアの物語

「母さま」

息子の声にオクタヴィアは我にかえり、視線をやや下に向けた。お互いそっくりな顔を持つ、双子の息子と娘　イリスとユーニス　が大きな目を見開いてこちらを見ている。オクタヴィアは子どもたちに向き直った。

「なに？」

「母さま、このひとたちは誰？」

ユーニスは自分たちの目の前にある肖像画を指差した。先ほどオクタヴィアが見入っていた絵だ。

「これはね…千年前にこの国を建国した、建国王と王妃の若い頃の絵なのよ。千年前ローディアが作られてすぐに描かれた絵なの」

だが　その肖像画は奇妙だった。千年前に描かれたというのに古ぼけていなく、保存状態が良いとしてもこうはならないだろう。まるで昨日完成した　とでもいうかのように額縁は綺麗で、埃も積もっていない。

そこには二人の男女、いや少年と少女が描かれてた。少年は黒髪に切れ長の、緑色の目の持ち主だ。見ているこちらを射抜くような目で不敵そうにどこか皮肉めいた微笑みを浮かべている。隣の少女は肩につくかつかないかぐらいの長さの銀髪に琥珀色の持ち主だ。容姿が代々のローディア王族の物なので、ローディア王家の人間なのだろう。こちらはどこか幸せそうに微笑み、年相応の表情だった。共通しているのは二人とも目をひく、ちょっと珍しい顔立ちであることだろうか。イリスはそこまで考え、ふと疑問が浮かび口にした。

「でも、母さま。この人は緑の目だ」

「そう…建国の祖アスランは元々は平民のく森ノ民の血をひく若

者だったと伝えられているのよ」

オクタヴィアの言葉にふたりの子どもたちはそっくりな顔を同時に傾げた。

「あなたが習ったローディア史ではさほど触れないことだから知らないのも無理はないわ。……でもね、王家の代々の子どもたちは十三歳になると必ずこの＜建国ノ間＞に来て今から話すことを聞くのよ」

＜建国ノ間＞とは王都アレイラの王宮の、地下にある＜地下迷宮＞の中にある秘密の広間のことだ。この迷宮の存在を知るのは王族、それも直系の者だけなのだといリスとユーニスはオクタヴィアに教えられた。

「あなたたちもこの国に伝わる伝承は知っているでしょう？」

オクタヴィアが唐突に話題を変えたため、イリスとユーニスは面食らった顔になったがユーニスがおずおずと答えた。

「はい、母さま。ええと……＜黒衣の王＞、＜イリスの唄＞、＜リクスルのアユーラ王妃＞……」

ユーニスが指折り数えて伝承を挙げるとイリスがそつと言い添えた。

「……＜聖戦ロイア＞」

「そう。今から話すことは、その伝承のもつと詳しい話、建国の秘密についてのこと。なぜそれを今この場所で話し、なぜあなたたちが知らなければならないのかは……この話、建国の真実を聞いたら分かるでしょう。……よくお聞きなさい。いいわね？」

普段は優しく穏やかなオクタヴィアの真剣な、まるで政治をしているときのような顔つきにふたりは驚いたが、しばらくして同時に神妙な表情でこくりと頷いた。

オクタヴィアは肖像画を見上げて奇妙な記憶をたどるような顔になり、やがて口を開いた。

「千年前　＜混沌の時代＞と呼ばれた時代があった。その頃双狼大陸は国同士の領土争い、内乱などで乱れた時期を迎えていた。かの有名なアルカシアの民族統一とてまだ成し遂げられていなかったし、草原の国エレンシアではセルイアとの大規模な領土争いが勃発していた。その頃この国はまだロイア王国と呼ばれていた。……ロイアは隣国ラスベルクと長きに渡り争い、戦争を繰り返していた。休戦協定が結ばれたときもあつたけれどラスベルクは当時の国王サイオンが即位してから、頻繁に国境争いを始めた。……ロイアの当時の国王はアウルス・ロイア。アウルスにはふたりの子どもがあり、双子の王子と王女だった。名前はディーンとエリン。二卵性双生児の、よく似た双子だった。対するラスベルクのサイオン国王には三人の子どもがあり、王子がふたり、王女がひとりだった。リュオン、グディアス、レイリアという名前の子どもたちで、そのうち長子のリュオン王子には、長きに渡りロイア国民の憎しみを一身に集めることになる運命が待ち受けていた。……とはいえこの物語で主に語られるのはロイア王女エリン、ラスベルクの第二王子グディアス、それから戦術予報士を志していた少年アスランの三人だから、まずは王女エリンの話、すべての始まりの物語から始めましょう」

## オクタヴィアの物語（後書き）

リンダの翼で名前だけ登場した方たちです。  
次話から本編に移ります。

### 予定タイトル

一章 アレイラ陥落

二章 復仇の誓い

三章 グディアスとアディン

四章 神の手

五章 アレイラ奪還

六章 魂に響くもの

最終章 再生



## 一章 アレイラ陥落 1・悲劇への序章

「姫さまっ！」

リアンシエは自らもラスベルク兵に拘束されながらも必死に声を張り上げた。リアンシエの視線の先にはラスベルク兵に髪を捕まれて連行されてゆく乳兄弟の王女の姿がある。

「姫さま 姫さまっ！」

リアンシエの身を切るような悲痛な叫びにリアンシエを拘束していたラスベルク兵の目に哀れみのこもった光が浮かんだ。王女と引き離されたリアンシエは王女が引つ立てられて回廊の奥に向かってしまうとがっくりとうなだれた。

ラスベルク兵は別方向に連れていこうとリアンシエを促した。リアンシエはうなだれたまま大人しく連行され、ラスベルク兵からはその表情が見えない。

リアンシエはうなだれたまま床の模様を見続けていたが不意にそつと後ろを向き、王女の姿が回廊の奥に消えたのを確認すると何事もなかったかのように床に視線を移した。

（……これでいい）

後は王女の機転と運に賭けるだけ。

（どうか、あなただけは生きて）

リアンシエは生まれたときから常に側にいた乳兄弟の幸運を祈り、

そして恐らくはもう彼女と会うことは叶わないであろう己の運命を思い、ぎゅっと目をつぶった。

「歩け」

ラスベルク兵 ラスベルク騎士団青蛇隊青騎士、レジナルド・デ

ユレス は王女の髪を掴んだまま愉悦を含んだ口調で命令した。

捕らえた当初は暴れた王女も今は諦めたのかされるがまま、その美しい銀髪を無造作に掴まれていてもさして抵抗をしなかった。

レジナルドは自らの幸運　長年争っていたロイアの今や唯一の世継ぎの王女を己が捕らえたこと　に酔いしれていた。

ロイアが白旗を掲げ、王宮にラスベルク騎士団が入ってからまだ二時間も経っていないだろう。王宮入りしてまもなくロイア国王、王妃が共に自害しているのが発見された。ラスベルク軍総司令官たる第一王子リュオンの命によりレジナルドは青蛇隊小隊長の指揮のもと、ロイアの遺児エリン王女の行方を探索していた。元々王宮と名の付くものは広大なものである。王都アレイラが陥落してからさほど時間は経っていないとはいえ王家の遺児が秘密の抜け道を使って密かに落ち延びる　、このく混沌の時代>と呼ばれていたこの時代ではさほど珍しい話ではない。リュオン王子は王宮入りし国王夫妻の自害の後を発見した後王家の遺児エリン王女の行方が掴めぬことを知ると早急に手を打った。

ラスベルク騎士団に王宮のロイア兵残党を捕縛、抵抗するならば殺害せよ。このリュオン王子の命はすみやかに実行される。やがて王子は王宮を徐々に掌握、仮の占領軍司令部すらもうけてしまう。同時に王子はある命を伝令を通じて発令する。ラスベルク騎士団青蛇隊、紅蛇隊に王女の探索を命じ、発見しだいすみやかに司令部に連行するようにと。そして王子の命にはこうも付け加えられていた。

もし捕らえたらけして傷つけぬよう、そしてけして逃がしてはならぬと。

リュオン王子の旗本隊からの伝令が届いたときレジナルドは密かに鼻を鳴らした。仮に捕らえたとして、ひ弱な王女を逃がすなどと、ラスベルク騎士団たる我らがそんな醜態をさらすでも？レジナルドはそう考え、とはいえ自分だけが王女を見つける確率は高くないだろうと軽く考えていた。

だが、レジナルドの属する小隊がたまたま命じられた広大な王宮の

一角 レジナルドの見立てでは王族の居住区 に押し入ったとき、王女と侍女らしき人物が逃げ延びようとしているところを発見した。そのとき王女をレジナルドが、侍女を小隊の後輩のジャニイが捕らえた。……捕らえた直後小隊長のジヨウの喜び方は一種異様であった。レジナルドとジャニイを褒めちぎり己が王子に報告する旨を小隊の騎士たちに伝え、レジナルドとジャニイが捕囚の少女たちを連行するように言い置くと慌ただしくその場を後にした。

ジヨウ小隊長は同郷の騎士だ。この小隊長、少々おつむが弱く上昇志向もさほどない、気が優しく仲間思いなやつで 悪く言えば人を出し抜くという発想がない 恐らくはリュオン王子に報告するときにレジナルドの名前をつげてしまう つまり自分だけ手柄を横取りする発想もない。今回の王女捕縛の手柄は少なからずレジナルドに入り込んでくる。その、まだ見ぬ<甘い蜜>にレジナルドは酔いしれていた。

<甘い蜜>のためにレジナルドはジャニイを説き伏せて彼とは別の道でリュオンのもとに向かっていた。ジャニイが向かった方向に行くとな多くの騎士の目に王女をさらすことになる。もっと位の高い他の騎士に因縁をつけられて王女を取られてはたまらない。レジナルドはそう考え、人気のない道を辿っていた。

幸いアレイラに進軍する前、アレイラ防衛の最後の防壁とも言うべきウイスレの地で王太子デインの首級が挙げた直後、ラスベルク騎士団の面々 各隊の隊長から下っ端の傭兵まで は王子リュオンの命により、王都アレイラ及び王宮の詳細な図を記憶させられていた。もっとも図をすべて記憶しきれた者はいないだろうが。レジナルドは平凡なラスベルクの王都の宿屋で生まれた男なのでラスベルクには兵役義務があるのだ

文字の読み書きはあやしかったが、記憶力はめっばう強かった。今回はそれが幸いし、レジナルドは記憶を頼りに道を選んでゆつくりと足を進めていた。

（……ラスベルクの豚が）

レジナルドの下卑た口調と言葉を聞いたエリンは、その可愛らしい顔に似つかわしい言葉をレジナルドに向かって心の中で浴びせながら密かに周囲の様子を窺っていた。

先ほど捕らえられた、王女宮から随分離れた場所に来ていたらしい。周りにはあまり人気がなく、恐らく他のラスベルク兵は国王夫妻が自害したという本宮の方に詰めているのだろう。

（父さま、母さま。ライアス。……リアンシェ）

父母、そして今現在自分が実行しているこの脱出計画を練りエリンに伝えた後父母を追って自害をした戦術予報士（軍師）のライアス、最後まで自分についてきてくれた乳兄弟のリアンシェを思うとエリンの胸は熱くなった。

だが、感傷に浸っている暇はない。

エリンはレジナルドに髪の毛だけを掴まれて歩いていた。拘束の常套手段の手の自由を奪う、をしないこのラスベルク兵の神経をエリンは密かに疑っていた。舐められているのか、油断しているのか……おそらくは両方だろう。エリンはレジナルドに気取られぬよう、頭を下げた状態で再び周りを見渡し、ある物に目をとめてスツと目を細めた。

（見つけた）

エリンの命がけの逃亡劇が、始まる。

## 一章 アレイラ陥落 2・アレイラが泣いている

アレイラが、泣いている。

アスランは風にのって聞こえてくる人々の悲鳴、恨みをのんだ言葉、そしてラスベルク兵の下卑た声が己の耳を空虚にすり抜けてゆくのを感じた。

アレイラが陥落してから丁度一日が経ったが、アスランの住むアレイラのランス地区にはラスベルクの手はまだ届いていない。早馬で王都に、最後の防壁であるウイスレが陥落し、デイン王子が落命したことが明らかになると王都は哀しみと怒りに包まれた。だが

指揮官の王太子は死に、王都の守りの要、対ラスベルク戦において最後の砦と言わべきウイスレが陥落した今王都アレイラにラスベルク軍が侵攻するのはもはや時間の問題であるのは明らかだった。ラスベルクは王都を包囲し、侵略前にいくつか条件を指定して降伏勧告を出してきた。国王アウルスは疲弊しきつたロイア軍の状態、戦力、どれをとってもラスベルク軍との戦力差が広がってしまったことを鑑みて苦渋の決断を下した。白旗をあげ、降伏をするという選択をしたのである。王都を戦火に巻き込むわけにはいかなかったのだ…。

王都は、あっけなく落ちた。ラスベルク軍は王都に進軍し、ほぼ無傷の状態で王宮入りした。

だが ラスベルクは国王夫妻が自害をし、いまや唯一の世継ぎの王女エリンが行方知れずになったためにアレイラの探索という名の略奪、もしくは暴虐の手を伸ばした。

国王の決断に涙しつつも占領軍の指示に従い従順に各々の家に引き籠もっていた市民たちを、ラスベルク兵は踏みにじった。流石にラスベルクのリュオン王子は王族、貴族クラスの居住地区には手を出さぬよう言い含めたらしいが、もっと手の届く手頃な地区 下町

のあまり位の高くない者たちの住むファーディオ、ベルニラ、ランスなど　はラスベルクに蹂躪された。

そもそも長きに渡り争い、血を流してきたロイアとラスベルクである。両国の間で何度も繰り返し行われたロイア・ラスベルク戦役において、多くの兵が命を散らした。ラスベルクは多大な犠牲を払い、多くの同胞を失ってようやく戦いの終止符を打ったのだ…。アレイラを占領したラスベルク兵たちは親兄弟を無くし、心の奥底にしまいこんだ哀しみ、友が目の前で討ち死にし生まれた負のどす黒い感情を爆発させたのだ。その矛先が市民に向き、王都は暴虐の都と化した。

……もつともそのような高尚な理由もなく、ただ略奪を働いた輩もいなかったわけではないだろうが…。

だが、直にここにもラスベルクの手は来る。

ランス地区は王都アレイラの、比較的身分の低い者たちが学問を展開している地区だ。下町とはいえ、各国で名を馳せている高名な学者が私塾を開いているため、ランスには周辺諸国　ライドル、エレンシア、リクスル、＜東狼の国＞アルカシアなどから学生が学びに集まる所でもある。恐らくそのことも、ランスにラスベルクが強引に押し入らない理由のひとつだろう。

今アスランのいる建物を含めて、ランス地区は非常に入り組み複雑な造りをした地区だ。だんだん人が増えるにつれて建て増しを行ってゆく内に奇妙な形の建物、裏通りが出来たのだろう。今ランスでは表向きは静かな様子ではあるが、裏通り、私塾の中などで人々は集まり秘密の集会を開いていた。

アスランもまた先ほどまで友人のレンやヒューらとともにロウ・ユアン師の下に集まり今後のことに関して議論を交わしていた。

約二十分ほど前。

「　ね、アスランさん。もし…もしエリン姫さまが無事に逃げ

延びていたら…市民は**ほくたち**どうなるんでしょうか？」

「どうなるって…。まあ、もし僕たち市民の誰かが姫さまを匿っていたと知れたら…匿った者はなぶり殺しだろう」

同門の後輩ユーニの疑問にアスランは感情を殺した淡々とした口調で答えた。

アスランの言葉に卓を囲み、議論を白熱させていた少年たちは押し黙った。

今、アスランたちロウ・ユアン師の私塾の塾生たちはアスランの養い親のマリヤとハリー夫妻宅にいた。少年たちはロウ・ユアンの到着を待ちながら話し合いをしていたのだ。

ロウ・ユアンはアスランの養父の**ちち**ハリーとともに近所の私塾の老師、学者の集まる秘密の集会に参加してしていない。アスランの養母のマリヤは少年たちの傍の椅子で黙って繕い物をしている。

「でも、姫さまはどうやってラスベルク兵の手を逃れたんだろう？」  
ヒューは重苦しくなってしまった空気を和らげようと話題を投げかけた。

王女エリンが王宮から行方知れずになった事実をラスベルクは伏せていたが、市民たちの間では拡がりつつあった。しよせん緘口令を敷こうと人の口に戸はたてられぬ、ということだ。

もちろん市民たちは敬愛する王女がラスベルクの虜囚にならなかったことに、一縷の希望を見出していた。

今のランス地区では王女の行方についてがもつとも議論されているに違いない。

「…だってさ、王宮にはラスベルクの悪魔どもがうじゃうじゃいるんだぜ？姫さまひとりで逃げるのってどう考えても無理だろ？」

「でも、実際姫さまは逃げちまつてるみてえだし…ラスベルク兵だつて今搜索してるってラデュ・ルイ塾のシリルがさっき言ってたじゃねえか」

「でも…エリンさまがもしランスに来たらさあ、みんな匿うのかな」  
レンの言葉に黙って縫い物をしていたマリヤは顔をあげてレンを睨

んだ。

あたしたち

「…国民が姫さまをラスベルクの豚どもに渡すわけないじゃないか。あたしは姫さまを売るくらいなら舌を噛み切ることゝ厭わないよ」

「わかったわかったおばさん…そう本気な目になんないでよ」

レンは肩をすくめマリヤはあたしは本気さ、と言い縫い物に戻った。

(…確かに、エリンさまが王宮をひとりで逃げ出せるとは思えない)  
アスランは先ほどのヒューの言葉に心の中で同意し、手すりに寄りかかって景色を眺めた。

(そもそも 頭がそうとう切れるというリユオン王子が退路を絶つてないわけがない)

だが、現実王女はラスベルクを出し抜いて現在も行方知れずなのだ。アスランは己の黒髪をくしゃりとかき、常の彼からしてみれば珍しく苛立った表情で目を細めた。

(分からない。どうして…)

「この僕が予報に詰まるなんて」

アスランはうつとりするような緑色の瞳で屋上から見えるランスの景色を見渡したがそこには変わらぬランスの町並みが見えるだけだ。アスランの頭の中には先ほどのマリヤの鋭い言葉が響いたままだった。

あたしたち

…国民が姫さまをラスベルクの豚どもに渡すわけないじゃないか  
いか

同時にある言葉も響いている。目を閉じると脳裏にキラキラした銀と琥珀色が浮かんた。

アスランは優しいね……

「僕は あんたを死なせたくない」

アスランの呟きは闇の中に響き、誰にも聞かれることなく消えた。



やや冷たい風が煮え立ったアスランの頭をゆっくりと冷やしたのか。  
（　　仮にエリンさまが逃げたとして、何処に逃げる？）

アスランは真顔になり、いつもの予報をたてるときのクセ　無表情  
になり、右親指の腹を左一指し指でこする　を始めた。

王女のひ弱な足では地方へ落ち延びる以前にこのアレイラから逃げ  
るのも無理だろう。

なら、この多くのラスベルク兵のいるアレイラの誰を頼る？

アスランは指をこすり続けたが、不意に手をとめ、頭に浮かんだ答  
えを口に出す。

「ユアン師……！」

どうして気がつかなかった？　そもそも自分が予報士を目指したのは

「……くそつたれ！」

アスランは己をののしり、手すりから離れると備え付けの階段へ走  
った。

## 一章 アレイラ陥落 2・アレイラが泣いている（後書き）

アスラン、登場です。影の薄いエリンよりめだってますね：  
次回はこの話で語られているエリンの逃亡劇の話の予定です。

補足：アスランの容姿について

アスランは文にある通り黒髪に緑の目の容姿です。＜リンダの翼＞のリンダやアリオスのように「あの一族」の血をひいているわけですが＜混沌の時代＞ではあの一族の存在はあまり明かされていません。なので混沌の時代の人々の間ではちょっと珍しい容姿だ、という程度の認識です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9802i/>

---

聖戦ロイア

2010年10月14日14時15分発行